

で両所見の一致が82%であった。反対にシンチで陰性とされながらCAGで狭窄所見のあった偽陰性が17例(15%)で、うち狭心症が16例で12例は50%以下の狭窄、残り4例は75%以上の狭窄であった。50%以下程度の狭窄や、75%以上の狭窄でも良好な側副路があれば心筋の脂肪酸代謝に影響ないと考えた。偽陽性は3例あり、すべて拡張型心筋症であった。安静時BMIPP心筋シンチの早期像は虚血性心疾患の診断に有用であった。

10. ^{201}TI 心筋シンチグラフィにおける ^{201}TI 分布状態の定量化：拡張型心筋症での検討

加藤千恵次 伊藤 和夫 古館 正従
(北大・核)
小野 智英 (同・循内)

拡張型心筋症(DCM)例での ^{201}TI 心筋シンチSPECT像の ^{201}TI 分布状態の不均一性を一次モーメントで客観的に数値化する方法を試みた。一次モーメントは画像の2次元的な濃度変動を敏感に抽出する定量的尺度である。対象はDCM例20例、対照例19例。各症例の ^{201}TI 心筋SPECT長軸矢状断層像12枚から一次モーメントの総和を算出した。一次モーメントは ^{201}TI 分布不均一程度の視覚的評価との有意な関係を認めた。また一次モーメントはDCM群では正常群より有意に高値であり、心不全例では非心不全例より有意に高値を示し、左室駆出率との有意な負の相関を認めた。一次モーメントは、 ^{201}TI 分布状態の視覚的評価を適切に数値化し、DCMの臨床像を適切に表現する指標になりうると考えられた。

11. 川崎病の経過に伴う心筋スキャン所見の推移

西澤 一治 (弘前市立病院・放)
斎藤 俊光 (同・小児)
米坂 勘 (弘前大・小児)

冠動脈病変を有する川崎病16例に経過を追ってdipyridamole負荷心筋スキャンを施行し、CAG所見の推移と比較検討した。スキャン所見は、16例中改善10例、不变5例、悪化1例であった。初回のスキャンで異常を認めた12例のうち10例は所見の改善を認め、他の1例は不变、1例は悪化した。初回ス

キャンが正常であった4例は再検でも異常を認めなかった。CAG所見との対比では、CAGで改善を見た7例中5例はスキャンも改善、CAG所見に変化の見られなかった7例でも5例はスキャンで改善を見た。スキャン所見が悪化した1例はCAG所見でも悪化した症例であり、心筋スキャン所見の推移が改善または不变の場合、冠動脈病変の悪化はないと評価できるようであった。

12. $^{201}\text{TlCl}$ 甲状腺シンチグラフィ delayed像撮像意義の再評価

遠山 節子 秀毛 範至 高塩 哲也
斎藤 泰博 吉田 弘 山田 有則
吉川 太平 山口 香織 竹井 秀敏
油野 民雄 (旭川医大・放)
佐藤 順一 石川 幸雄 (同・放部)

甲状腺結節に対する $^{201}\text{TlCl}$ delayed像撮像が良悪性の鑑別に有意かどうか再評価を行った。対象30例(悪性17例、良性13例)で $^{201}\text{TlCl}$ 静注後early imageとdelayed imageを撮像し、各結節のearly ratio、delayed ratio、washout rate、retention index、大きさを求める有意差を検討した。いずれの指標も良悪性間の平均値で差を認めたものの有意差は認めなかった。以上より甲状腺結節に対する $^{201}\text{TlCl}$ delayed像撮像が良悪性の鑑別に必ずしも有用であるとはいえないのではないか、との結果を得た。

13. $^{201}\text{Tl}/^{99m}\text{Tc}$ サブトラクション副甲状腺シンチグラフィ——9年間の経験——

塚本江利子 古館 正従 (北大・核)
F.R. Ferguson, J.D. Laird, C.F. Russell
(ベルファスト市ロイヤルビクトリア病院)

1985年1月から1993年12月までロイヤルビクトリア病院にて術前にシンチグラフィを施行した原発性副甲状腺機能亢進症160例につき検討した。単発性腺腫145例のsensitivityは、全体で55.2%であったが、重量が増すにつれて良好となった。また、単発性腺腫を示すsingle hot spotを示したもの94例では、72例が正しく診断され、これをもとに、頸部一侧のみの手術(unilateral exploration)が施行された。多発性病変4例においては、シンチグラフィは、一病変

のみ陽性またはすべて陰性でその診断に有用ではなかった。8例は手術で腫瘍が発見されなかった。全体の手術による治癒率は95.6%であった。

14. Crow-Fukase 症候群の5例

丸岡 伸 山崎 哲郎 間島 一浩
坂本 澄彦 (東北大・放)

Crow-Fukase 症候群は多彩な症状を呈するが、なかでも polyneuropathy, organomegaly, endocrinopathy, M protein, skin change が高率であることから POEMS 症候群とも呼ばれている。稀な疾患であるが欧米に比しわが国に多く、多発性骨髄腫に比して若年に発症し男性に多い。当科で経験した5例の内訳は男性4例女性1例、年齢33-60歳、平均43歳で、主な症状としては末梢神経障害・下腿浮腫・色素沈着・多毛が5例全例に、肝脾腫が4例に、M蛋白・骨髄腫・胸腹水・髄液蛋白増加・うつ血乳頭・耐糖能障害・疣状血管腫・微熱がそれぞれ3例に認められた。骨髄腫を合併した3例のうち硬化型が1例混合型が2例で、いずれも骨シンチで陽性像として検出された。本疾患においては硬化型の骨髄腫を伴うことが多く、骨病変の検索に骨シンチが有用である。

15. 腰椎分離症における^{99m}Tc-MDP SPECT の意義

渡辺 磨 橋本 学 小林 満
佐藤 公彦 戸村 則昭 渡会 二郎
(秋田大・放)

腰椎分離症について、^{99m}Tc-MDP SPECT像と単純X線像、CT像との比較を行い、その意義を検討した。臨床的に分離症と診断された18病巣のうち、SPECTでuptake(+)は13病巣で、uptake(-)は5病巣であった。SPECTでuptake(+)の13病巣のうち、11病巣はいずれもCTで分離間隙の狭い、比較的早期の病巣であった。2例はSPECTでuptake(+)にもかかわらずCTで分離間隙が不明瞭であったが、そのうちの1例は1年後に両側分離へと進行しており、SPECT撮像の時期はきわめて早期の段階であったと考えられた。SPECTでuptake(-)の5病巣は、CTでいずれも分離間隙が広く、陳旧性の病巣と考えられた。^{99m}Tc-MDP SPECTは腰椎分離症の検出に優れ、早期の治療に貢献し得る可能性が考えられた。

16. 肝切除前後における^{99m}Tc-GSA シンチグラフィでの肝予備能評価

望月 孝史 加藤千恵次 志賀 哲
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正徳
(北大・核)

肝切除術前後に^{99m}Tc-GSA シンチグラフィを施行した18例をびまん性肝疾患の有無で2群に分け、肝予備能を反映するパラメータの検討をHH15, LHL15, 肝予備能インデックス(HPFI), 肝集積初速度(D0)を行った。びまん性肝疾患合併群では術前後のHH15, HPFI, D0に有意差を認めたが、びまん性肝疾患非合併群では有意差を認めなかった。LHL15は、びまん性肝疾患の有無にかかわらず有意差は認めなかった。びまん性肝疾患合併例の肝切除術後では、肝予備能を反映するパラメータはHH15である可能性が示唆された。

17. サルコイドーシスにおける⁶⁷Ga scan の検討

志賀 哲 望月 孝史 加藤千恵次
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正徳
(北大・核)

panda sign と λ sign は sarcoidosis 患者の Ga スキャンにおいて特徴的なサインと言われるが、panda sign の出現頻度は人種により違うとの報告もあり、また、胸部以外の病変への Ga 分布の頻度に関する報告は、少ない。われわれはpanda sign および、 λ sign の出現頻度および胸部以外の病変への Ga 分布を調べた。対象は、sarcoidosis 群29名、31スキャン、対照群94名、101スキャン。サルコイドーシスにおける λ サインの sensitivity, specificity は、それぞれ 52%, 100%。panda sign を認めた症例はなかった。眼病変、皮膚サルコイドおよび心サルコイドにおける病変への Ga 集積の陽性率は 6%, 18%, 0% と低かった。